

Norbert Henning/Siegfried Witte 著/田嶋基男訳

図説 消化器の細胞診 —— 日本語版 ——

(ATLAS DER GASTROENTEROLOGISCHEN
ZYTODIAGNOSTIK)

東大助教授 城 所 侑

御承知のように Henning 教授は消化器病の大家で細胞診に関する業績も多い。著者は細胞診の領域を胃に迄広げることによって消化器病の細胞診を体系づける自信を持ったようである。口腔から食道、胃、十二指腸、結腸にいたる消化管の各部に対し著者の行なっている検体の採取法、その処理方法、染色法、およびその成績の評価等について著者の見解を卒直に述べている。

記載は簡潔ながら正常像から各種疾患における細胞像までを広く説明を加えており、ことに剝離後変性により多様な像を呈することを考慮して組織における細胞像と対比しながら述べている点は面白い。

豊富なアトラスは初学者にとっても大変参考になると思う。

アトラスは大変よく出来ており、Papanicolaou 染色による色彩や細胞構造なども原版の姿をよく再現していると思われる。

著者は位相差像、および干渉位相差像をふんだんに駆使し、折にふれ

て Atebrin, Toluidinblau などの生体染色法を加えて Papanicolaou 染色による細胞像と対比しながら核内構造の状態を知ることが出来るよう配慮している。

しかしながら部分的には今日の日本の現状から見てやや違和感を覚えるところがある。このような部分に対しては訳者の田嶋博士はそれぞれに解説を加え、日本の現状と訳者の見解を述べて、読者の理解を助けている。

今日、日本で消化管の細胞診として、もっとも注目を集めている胃細胞診については著者は最も多くのスペースを費している。

そして細胞擦過用ゾンデを1948年に用いて初めて胃細胞診に成功したと序文冒頭に述べている。

Papanicolaou らが1946年に始めて胃液から癌細胞を発見し、それ以来胃液で著しい変性を受けた細胞を対象としていたことから考えると、擦過法は大進歩であったと思われる。これと相前後して日本でもバル

ーンその他による擦過法や洗滌法が盛んになり、X線、内視鏡の驚くべき進歩にともなって、直視下細胞診が普及し、今日では盲目的採取法が過去のものとなりつつある現状からみると、著者の胃細胞診に対する見解では日本における直視下法の成績を驚きをもって見ているという印象が強い。

それにも拘らず正常像、胃炎、胃潰瘍、胃癌等における剝離細胞に関する著者の見解は終始体系づけられてわかり易く説明されており、啓発されるところが多い。

本書は全般を通じてアトラスとして充分役立つのみならず、消化管細胞診の全貌を著者の目を通して理解しうる点大変興味深い。

ことに田嶋博士は細胞診に関しては多くの研究と充分な経験を重ねた練達之士であるだけに、充分に原文を理解したうえで訳しておられるのでわかり易いし、さらに要所要所に訳者の見解を加えて理解を助けるよう配慮されている。細胞診にたずさわるものにとってはぜひ一読したい本である。

B 5判 頁142 写真189 原色図125
定価 ¥5,000 円90